

米国の大学入学選抜の実状について

市川 貞男*

1 はじめに

中央教育審議会高大接続特別部会では、平成24年8月28日に文部科学大臣から諮問された「大学入学選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について」審議が進められてきた。

これには、大学入学者の多様化、大学入学選抜の選抜機能の低下、高校生、大学生の学習意欲の低下、大学入試センター試験の肥大化と実施体制の限界等がその背景としてあげられている。同部会では、高校教育、大学入学選抜、大学教育の一体的改革を改善についての基本的な考え方としている。

中でも、大学入学者に求められる学力を評価する新テスト「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」と高等学校において身につけた基礎学力を評価する新テスト「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入については、一体的改革の柱となるものであるが、関係団体から意見も寄せられ、多くの議論を必要としたところである。

本レポートでは、米国の大学入学選抜の実状について報告をするもので、大学教育の一体的改革、新テストの導入という日本の制度改革にあたり、時宜を得ているものとする。

本レポートは、次の構成である。

- 1 はじめに
- 2 米国の大学入学選抜制度の概要
- 3 インタビュー調査^①
大学関係者（UCバークレー校教授）
保護者（カリフォルニア州在住）
大学生（サンフランシスコ市内在住）
- 4 まとめ

2 米国の大学入学選抜制度の概要

米国の大学入試については、各大学ごとの入学要件に基づき、入学審査が行われている。多くの大学では、出願にあたって、受験生が提出するものは次のものである。

高校の学業成績、統一テストの成績、論作文（エッセイ）、課外活動等の履歴書である。大

学ごとの入学試験はなく、これらの書類選考によって合否が決まっている。

このほか、大学によっては、推薦状を添える場合や面接を行う場合がある。

（1）高校の学業成績

米国では、一般的に5・3・4制の学生を採用しているところが多く、14歳からの4年間は高校課程となる。

高校の学業成績としては、4年間のすべての成績が記載されるので、進学を目指す場合には、コンスタントに良い成績がとれるよう、計画的な学習プランを立てて、目的意識を持って履修をしていく必要がある。

高校の成績は、定期試験に限らず、授業態度や宿題の提出状況等を総合的に評価する点は、日本と同様であるが、宿題は、レポート形式が多く、質の高いレポートを作成するために、帰宅後、多くの時間を費やして課題をこなしているのが、進学を目指す米国の高校生の姿である。

高校4年間の学業成績は、総合平均 GPA（Grade Point Average）で、4（オール A）が最高点であるが、米国でよく耳にする人気大学を目指す場合には、これは実質最低条件であって、他の受験生との違いを示すには、これ以上の成果が必要となる。そこで、GPA を上げるために、より難度の高い課程 AP（Advanced Placement）を履修して、GPA のスコアを加算している。

高校の良し悪しは、日本同様に進学状況が大きな指標であるが、AP のクラスが多い方が、当然、人気の高い大学への進学率が高い傾向になる。公立高校の場合には、地域の税金で運営されている。税金は、住宅に課税されており、住んでいる地域の住環境が良い地域は、税収入がよいため、教育に予算をかけられる。したがって、AP クラスの数も多くなる。高校にとっては、AP 科目が受講できる高校としてステータスが得られ、住民にとっては、家屋の資産価値も高く保たれるという連鎖が成り立っている。

*放送大学大学院文化科学研究科修士課程 2011 年 3 月修了

なお、APの単位認定にあたっては、非営利団体 College Board が実施する、評価水準が一定に保たれた外部試験（Advanced Placement Examination）を受験する必要がある。

（2）統一テストの成績

米国の多くの大学では、SAT（Scholastic Aptitude Test）と ACT（American College Testing）という統一テストの得点を選抜に取り入れている。大学が指定する場合や、どちらでも良い場合があるが、試験は複数回受けられるので、学生は大学出願までの間で、一番良い点数を選んで、大学に提出することが可能となっている。

①SAT

SATは、College Board という米国の非営利団体が運営している統一テストである。SATには、英語（reading, writing）、数学（math）の統一テストと、SATsubject とされる科目別の試験がある。

一般に SAT と言われているのは、英語、数学の統一試験で、今後の大学での学業の基となる高校で学習しているスキルをテストするものである。一方の SAT subject は、英語、歴史、言語、数学、科学（English, history, languages, mathematics, science）の5つの領域から、20の科目テストで構成されている。学生が理系、文系等の大学のコース選択のガイドラインとするためや、一部の大学からの指定により、科目ごとに選択して受験するものである。

2014年から2015年の学期には、10月、11月、12月、1月、3月、5月、6月の7回の実施で、全国一斉に実施されている。

②ACT

ACTは、American College Testing program という米国の非営利団体が運営している統一テストである。

テストは、英語、数学、読解、科学、ライティング（English, Mathematics, Reading, Science, Writing）で、高校及び高校以降に必要なスキルをテストするものがある。SAT同様、全国一斉に実施される。

2014年から2015年の学期は、9月、10月、12月、2月、4月、6月の6回の実施である。

（3）論作文（エッセイ）

論作文は、大学ごとに統一された課題が用意され、出願時に提出する。筆者が取材した UC

バークレー校3では、受験生は、二つの課題について、それぞれレター用紙1枚にまとめることが求められている。同校では、選抜にあたって論作文を一番重要視していて、学生の能力や可能性、将来性を多面的に読み取っているとのことであった。

学生も、専門の家庭教師やガイダンス・カウンセラー、所属する課外活動の顧問などから、指導や添削を受けるなど、論作文対策を行っている。

（4）課外活動（履歴書）

日本の一般的な大学入学選抜と異なり、米国の大学では、学業成績だけでなく、課外活動当の経歴が重要な判定要素になっている。

人気の高い大学では、高校の学業成績や SAT や ACT だけでは差がつかないこともあり、高校生活における課外活動の成果は、受験生の身につけてきた能力や資質を総合的に判断するための重要な資料となっている。

したがって、大学を目指す米国の高校生は、学業で良い成績を取るための努力は当然で、課外のスポーツや芸術などにも力を入れている。高校のクラブでの活動の他に、放課後や休日等を使った、クラブチームでのスポーツやバレエ、ピアノ、バイオリン等の芸術のレッスンに励んでいる。

（5）推薦状や面接

推薦状や面接は必須ではない。大学により推薦状を求めている場合には、在学している高校や所属しているクラブの顧問等から発行してもらう。

筆者が取材した UC バークレー校では、奨学金の申請審査で推薦状を提出する学生もいるが、可否判定では、使わないとのことであった。同様に、面接は奨学金授与対象候補者となった者のみの実施である。

3 インタビュー調査

米国の大学入学選抜の実状をとらえるため、UC バークレー校 Joonhong Ahn 教授のご協力をいただき、同校における入学資格や条件等の入学決定方法についてインタビューを行った。あわせて、米国で大学受験を経験した米国永住権を得ている在米日本人や米国籍取得の方へ、同様にインタビューを行った。

それぞれの関係者へのインタビューは、下記

のとおりである。

○UC バークレー校

- ・インタビュー日時：2014年11月21日
午前
- ・場所：Etcheverry Hall, Ahn 教授研究室
- ・インタビュー対象者：UC バークレー校
Joonhong Ahn 教授 (Professor and Vice Chair
Department of Nuclear Engineering University
of California, Berkeley)

(1) 求める学生像や入学者選抜の目標

一つには、選抜における公平性ということである。日本の入学選抜は、結果としての点数における定量としての公平性であるが、米国では、多角的視点からの公平性が重要であり、例えば、点数をとる過程での公平性も重要である。

二つ目は、合格後、学生がこの大学でやっていけるかということである。卒業できるだけの資質を持たない学生を入学させることは、限られた資源を有効に利用していないばかりか、本来、この大学に入っているべき学生が入れないという不公平になる。この大学に入って、将来、社会的に仕事ができる人が欲しい。

(2) 入学資格や条件としての学業成績

要点は、これらの評価項目に対するデータや提出物を基に、前述の点を総合的に評価すること、いわばプロファイリングする、という点にある。

①高校の成績 (GPA)

高校の成績は、地域や学校間格差を考慮に入れて見ている。記載された GPA の点数を見ただけで判断するのではないということである。

②ACT や SAT 等の統一テストの成績

ACT や SAT の統一テストの成績は、選抜にあたって、GPA 並の要素である。

UC バークレー校では、ACT、SAT のどちらか一方のスコアでも、両方の記載でもよいが、学部によっては、特に特定の科目を見ている。例えば、工学部への志願に対しては、数学や物理、化学の成績を重視する、などである。

UC バークレー校の志願者の実状としては、ACT や SAT の統一テストの成績では、高得点すぎて差がつかない。しかし、そのような中でも、高校での科目の取り方などを詳細に分析する。

(3) 論作文 (エッセイ) での評価内容や観点
論作文は、志願者の人となりを知るために一番大切な材料で、いろいろな読み方をしている。

UC バークレー校では、二つの課題が提示され、両者とも提出する。課題は、「逆境におかれたときにどう対処したか」など、経験を通してまとめることが必要な内容である。

論作文は、アドミッションオフィスで、17歳の学生の文章表現を熟知している専門のベテラン担当者が採点にあたっている。論作文だけ分業的に読んでいるのではなく、論作文やその他のデータも同時に分析して判定する。

(4) 課外活動 (履歴書) で評価するもの

履歴書では、長期に継続しているもの、本人の成長が見えるものを、評価している。論作文にもあらわれてくる価値観や、正義感のベースになるものを見ている。

(5) 推薦状における要件

UC バークレー校では、奨学金申請の際に推薦状を出す学生もいるが、大学入学選抜の可否判定には、使っていない。

(6) 大学入試制度におけるアファーマティブ・アクション³

カリフォルニア州では、やめている。全米的にも減っている。

(7) その他 (課題等)

人口が増えていることで、競争が激化していることが課題といえる。大学が、受け入れの建物 (教室) を増やしていくことにも限界がある。制度的には、トップの何%は UC に入学できるにもかかわらず、入れない学生が発生していることが、最大の課題である。

対応策として、インターネットによる授業も検討され、一部取り入れられているが、直接対面で行う従来型の教育を受けている学生との間に格差が生じて不公平である、などの問題点があり、決定的な解決策はまだ見つかっていない。

もう一つは、授業料が値上がりしていることである。所得格差で、教育機会が損なわれることがあってはならない。

○保護者

- ・インタビュー日時：2014年11月15日から

12月4日午前・午後

・場所：カリフォルニア州サンフランシスコ及び周辺エリア

・インタビュー対象者

カリフォルニア州在住の4名の保護者

A:大学3年生の母

B:大学3年生の父

C:大学卒業3年目の父

D:大学2年生と大学卒業1年目の父

(1) 大学選択で重視した事柄

A:親の考えでは進学しても、途中のドロップアウトになるので、本人の行きたい大学を優先させた。

B:応用がきく学問を学べるような大学を勧めた。

C:子どものやりたい分野での選択を優先させた。

D:州外を避け、選択幅の広がる規模の大きい大学を選ばせた。また、学費の関係から公立を選ばせた。

(2) 高校在学時に留意した事柄

①高校の成績(GPA)について

A:本人は、気にしていたようだ。

B:目的意識を持っていたようだ。

C:かなり意識をして、APクラスも自分で選択していた。

D:苦手教科の克服のために、努力をしていた。親も参考書などを紹介した。

②ACTやSAT等の統一テストの受験状況

A:高3の後期にSATを高4の前期ACTとSATを計3回受験した。

B:高3後期からACTとSATを2回ずつ受験した。

C:高3の後期と高4の前期にSATを計2回受験した。

D:上の子は高3の後期にSATを2回、下の子は1回受験した。

③課外活動等への取り組み

A:生徒会活動とフットボールとソフトボールを4年間続けた。親からも勧めた。

B:日本語学校を高3まで続け、ピアノもやっていた。

C:アメリカンフットボール、レスリング、クロスカントリーを年間切らずシーズンをつないでやっていた。そのほか、コ

ミュニティ(ボランティア)活動にも参加した。

D:コミュニティ(ボランティア)活動に参加していた。

(3) 出願にあたって留意した事柄

①論作文(エッセイ)の作成

A:スポーツの体験と関わらせてまとめた。

B:生徒会活動の体験やマルチカルチャーについてまとめた。

C:高3の9月から11月まで、進学のためのカウンセラーを家庭教師として依頼していたので、論作文もみてもらっていた。

D:子ども任せで、内容についても把握していなかった。

②履歴書(課外活動等)の作成

A:結果的に、課外活動が評価されたと思っている。

D:親が下書きをした。

③推薦状に関わる事柄

A:学習面については、英語と数学の先生に、スポーツについては、フットボールのコーチに書いてもらった。

D:所属していたコミュニティ(ボランティア)団体に書いてもらった。

(4) その他(米国の大学入試制度の長所や課題、所感等)

A:最終学年での一発受験でなく、長い高校生活でのGPAや、点数だけではない課外活動も考慮され、総合的に人物を見てくれる点は良いと思う。

本人は常に成績を気にして、大変な日常生活で、気を抜く時間がない。

C:一度の試験で決まるのではなく、全体を見てくれるので、学生にとって、良い制度だと思う。

D:受験前に急に勉強しても受かるわけがない、学力だけでない選抜制度となっている。

各高校には、ガイダンス・カウンセラーがいるので、そのアドバイスで受験するので、無理な志願はない。

○大学生

- ・インタビュー日時：
 - 2014年12月6日 午後
 - 2014年12月13日 午前
- ・インタビュー対象者
 - A：大学3年生（女）サンフランシスコ在住
 - B：大学1年生（男）サンフランシスコ在住

(1) 大学の選択や出願にあたって留意したこと
 A：大学の選択では、将来の職業についての目標があったので、必要な専門性を重視して、高校のガイダンス・カウンセラーに相談して、志願先を決めた。
 B：大学の所在地や学部を重視して、高校の先生に相談しながら決めた。

(2) 高校在学時に留意した事柄

①高校の成績（GPA）について

- A：高校のGPAについては、高校生活で特に、意識はしていなかったため、プレッシャーは感じなかった。
- B：高校2年生の頃から意識し出した。GPAをあげようと、APは11科目とった。

②ACTやSAT等の統一テストの受験状況

- A：ACTやSAT等の統一テストの準備として、校内で放課後設けられている統一テスト対策の授業を受けていた。高校3年生の後期にACTとSATを1回ずつ受けた。
- B：テストに慣れようと考えて、高校1年から受けていた。合計すると、ACTは1回、SATは3回受けた。

③課外活動等への取り組み

- A：課外活動では、進路に関係するボランティアを続けていた。
- B：1年を通して空白の期間がないように、スポーツでは、陸上とクロスカントリーをしていた。そのほかにボランティア活動を随時していた。

(3) 出願にあたって留意した事柄

- B：公立と私立と合わせて4つの論文文となったので、高校で課外の授業でエッセイのクラスに入って準備していた。

(4) その他（米国の大学入試制度の長所や課題、所感等）

- A：米国の大学入試制度では、高校1年から

目標を持っていないと間に合わないが、勉強したら入れる。1回きりの日本の入試と違って、チャンスが多く、楽だと思う。

- B：1回の入学試験だけでない点や、成績以上にクラブなどの活動を見てくれる点を考えると、自分は楽に感じた。

4 まとめ

インタビューに応じてくれた保護者や学生は、米国における大学入学選抜制度は、1回きりの試験や学力成績だけでない総合的な評価である点を、好意的に受け止めていた。

それは、UCバークレー校の教授が語っていた「選抜における公平性」、「日本の入学者選抜における結果としての点数における定量としての公平性ではない、多角的視点からの公平性」という考え方が、受け入れられていることを示すものとする。

本稿をまとめている最中（平成26年12月22日）に、中央教育審議会より、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」が答申された。

答申では、「多様な背景を持つ高校生一人ひとりが、高等学校までに積み上げてきた多様な経験や能力を度外視し、18歳頃における一度限りの一斉受験という画一化された条件において、知識の再生を一点刻みで問う問題を用いた試験の点数による客観性の確保を過度に重視し、そうした点数のみに依拠した選抜を行うことが『公平』であるという、従来型の『公平性』の観念が社会に根付いていることがあると考えられる。」と述べ、「『公平性』の観念という桎梏は断ち切らなければならない」と断じている。

そのために、既存の「大学入試」と「公平性」に関する意識を改革し、「一点刻み」の客観性にとらわれた評価から脱し、各大学の個別選抜における多様な評価方法の導入を促進する観点から、大学及び大学入学希望者に対して、段階別表示による成績提供を行う「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を実施するとしている。

答申では、新たに導入する「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の具体的な制度設計とともに、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」における段階別表示の具体的な在り方や、大学

にどのようなデータを提供するのかなど、この先における改革を実現するための検討事項の骨子を示し、国に推進を求めている。

高校生の生活の有り様を変える大学入試制度改革の方向性は、筆者には、米国の大学入試選抜制度に近いものになるように思える。この先、新テストがどう制度化され、各大学の個別選抜の評価方法がどのように取れんされ、形作られていくのか、我が国における従来型の「公平性」の観念を断ち切る新たな評価の具体に向けた専門家会議等による今後の検討に注目していきたい。

参考 URL

- ・文部科学省高大接続特別部会
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuky_o12 (2014年12月2日参照)
- ・全国高等学校長協会
<http://www.zen-koh-choh.jp/iken/iken2014.html> (2014年12月2日参照)
- ・国立大学協会
<http://www.janu.jp/news/whatsnew/20140825-y-013.html> (2014年12月2日参照)
- ・SAT - The College Board
<http://sat.collegeboard.org/home> (2014年12月2日参照)
- ・American College Testing program
<http://www.act.org/> (2014年12月2日参照)

(注)

- (1) 国立大学協会は、全大学に対するアンケート調査を実施して「今後の国立大学の入学者選抜の改革の方向について」、独自に基本的な考え方をとりまとめて提示した。全国高等学校長協会からも、部会論議について疑問や危惧が意見表明された。
- (2) インタビュー調査は、筆者がカリフォルニア州に長期滞在している関係から、サンフランシスコ及び同ベイエリアに限定したものである。
- (3) 人種や性別などにより、入学者数に受け入れ枠や目標値を定めて、黒人やヒスパニック、女性などの就学の機会を保障しようとする制度。